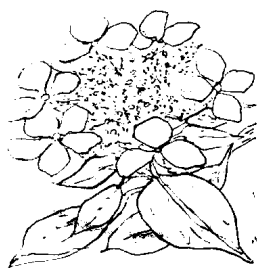


誰も知らないあした

—ガン病棟の手記—

中 島 道



時事通信社

▼著者略歴▲

中島 道（なかじま みち）

昭和六年、京都市に生まれる。同二十八年、東京女子大英米文学科卒、東京放送に入社、アナウンス部勤務。三十一年結婚。三十四年、東京放送を退社しフリーとなる。三十六年、長男出産。四十一年、中央大学通信教育部法律科卒、つづいて同大学大学院にて刑事法専攻。四十五年七月、乳ガン手術。

誰も知らないあした

—ガン病棟の手記— 定価 480 円

昭和四十七年四月 十日 初版
昭和四十七年五月二十五日 二刷

著 者 中 島 道

発行者 福 田 喜 次

東京都千代田区日比谷公園一—三
発行所 株式会社 時事通信社

電話（五九二）二二二（大代表）
振替 東京 八五〇〇〇

東京都品川区東品川一—六—一六
印刷所 株式会社 太平印刷社

（落丁・乱丁はおとりかいたします）

も く じ

I	やっぱりガンだった	1
II	手術台へ	33
III	この痛ましき人たち	67
IV	大部屋にて	101
V	ガン病棟の愛憎	137
VI	いのちと死と	171
VII	患者・医者・医療制度	205
VIII	女ごころ	229
	あとがき	256

I やっぱりガンだった



入院の朝は、雨であつた。

狭い庭に、あじさいのさかりの花が豊かな盛り上がりを見せて、激しい雨に揺れつづけている。

「わア、かみなりよ！　いよいよ梅雨があけるのね」

私は声をあげた。

夫の朝食後のコーヒーをポタリポタリと濾しながら、当分この日課ともお別れだ……などと、私はちよつと減入っていたのだが、バリバリと雲をわたる突然の雷鳴に、気分がホッと明るくなった。

夫は、例のごとく音を極度に絞ったテレビの画面をときどき横目でにらみながら、新聞を食器の上ひろげて読みふけている。

太郎といえば、さつきからポケットと、ランドセルの中身を出してみたり入れてみたり、今日集める給食費の袋を今ごろになつてランドセルの中から取り出したりしている。こんなことでは、私の入院中はどうなることだろう。

でも、無理もない。この子はまだ九つというのに、祖父（夫の父）、伯母（私の姉のサチ子）を、それぞれ肺ガン、皮膚ガンで失っている。そして私が昼間テレビ・ラジオの仕事で出かける留守の間、太郎の世話に来てくれ、心底から太郎を可愛がってくれ、「太郎バアバ」と甘えきっていた人をも直腸ガンで奪われ、子供心にも、ガンになれば死ぬものと思つてきたのだから。

昨夜もいっしょにふろに入りながら、いつものように友だちの話や飛行機の型のあてっこをして

いたが、突然、太郎はいったのだった。

「ママ！ あ、ちがった、お母さま！ お母さま、本当にガン？ でも乳ガンというのは手術をすればすっきりいいんだよねッ。ホラお母さま、むかし占いの人にいわれたんでしょ。三十いくつで一回死にそうになって、そのときうまくいけば、あとは七十まで長生きするって……そういわれたんだよねッ」

一昨夜、急に母親の入院を告げられた彼。昨日は一日中プラモデル作りに夢中だったようなのに、心配してやって来た親戚をまじえての大人たちの話を、チャーソンと細かく聞いていたわけだ。それに、今まで、さんさん「日本人なんだから、お母さまって呼んでよ！」とたのんでも、パパ、ママといっていたのが、急に「お母さま」にかわった。

やっとランドセルを背負って、バッジを十以上もくっつけた黄色い安全帽をかぶり、出がけの挨拶にホッペタをつけにくる。

「お母さまア、手術は何曜日？ 僕、せっかくお母さまと同じO型なのに、どうして僕の血あげちゃアいけないの？」

「ママとっても嬉しいけど、でもね、太郎はもともとと大きくならなきゃならないんだから。お母さまがすごいおばあちゃんになって、ほんとに死にそうになったら、そのときは太郎のをうんと頂戴ねッ」

「僕、血あまつてるよ。ホラ、こんなに肥っているんだから、ねエ、ねエ、ホラ、おなかだつてすごい栄養だよ」

「今度はね、紀ちゃんや由美ちゃん、紀ちゃんのお父さんまで、O型のいい血をたっぷりいただけるのヨ。それに太郎はまだ一度も学校を休んだことないのに、ママのこんな病氣ぐらいでお休みしちゃア、ママがっかりよ。そのかわりお祈りしてよね。あ、それから、おばあちゃまにママが帰るまでいていただくから、毎朝ママにするようにおねつをさわっていただくのよ」

幼稚園の頃から、「太郎ちゃん起きる時間よ」と声をかけると、まだ目をつぶったまま、おでこを突き出して、熱をみてもらうのが習慣である。ぬくもりの中にそこだけヒンヤリとした感触で、私は太郎の健康な目ざめに毎朝、感謝してきた。

けさ入院して、ひと月かかるかふた月かかるか、そしてそのあと、おそらく退院したり入院したりをくり返し、何年かの近い将来、必ずこの家から私は消えてしまう。私の料理をうまいうまいと、まさに舌鼓を打って食べてくれた夫と太郎が、私にいうようなわがままもいわず、他人のとのえた食卓にポツンと黙って向かっている姿が目にかび、とつぜん涙がもり上がってきて、私はあわてて手洗いに立った。

班の子供たちと傘をならべて太郎が学校へ行ってしまうと、かえってホツとして、私はいつもの

調子にかえる。

二、三日前にできあがったばかりの、思いつきミニの純白のブレザーのアンサンブルを、真紅のシャツに重ねてみる。この大雨のなかを、ガンで入院する患者にはそぐわないものと思わぬではなかったが、ちよつと切るだけで私は病人じゃないんだぞ、という気負いもあったし、それにこの夏のためにこしらえたドレスのうち一着だけでも、まだ両の乳房が豊かな曲線を描いているうちに手を通してやりたかった。

実家の母がつぶやく。

「あゝあ、本当に、なんの因果でこんなことになるんだろうねえ。娘二人とも、病氣一つさせないで健康に育て上げたのに、そろって三十代で私を残して……」

「ちよつと、ちよつと、いやだわゝ、私は死にませんからねえ。乳ガンなんて今どきガンのうちに入らないんだからって、昨日も説明したでしょう。こんなの心配してたら、オーバーだって笑われますからね。それよりね、お献立おねがいね。パパも太郎も好みは全く実家と同じだし。それからお天気になったら、れんぎょうの芯を一メートルぐらいで摘んでおいて下さいね。あゝ丁子さん、朝夕、ぬか味噌の世話を忘れないでね。私、昨日浄化槽に消毒液入れるの忘れたからおねがいね」

書道の勉強のために東京へ出てきた丁子さんは、もう四年以上家に住みこんで、私の仕事の連絡の電話受けを主に、家事を見習ってくれていたので、こんなときには実に助かった。

昨日は一日中、留守中のための整理を急いだのだが、あとからあとから用事がわいてくる。だが待てよ、どっちみち、私がなにからなまでにまで家の中を取り仕切っておける期間も、もう知れていゝる。死んだあと、別の人が来れば、家事のやり方はすっかり変わってしまうだろうし、なおったところで、こんなやり方は続けていけるはずはない。そうだ、目をつぶることだ。いちいち細かいことのために消耗しないように、慣らすことだ。たとえなにもできない身体になっても、少しでも長く生きてさえいれば、夫はまあ別としても、太郎や年老いた父母は、私がそこにいるだけでしあわせでいられるのだから……

そこまで考えると、サッパリと気持ちちがふっ切れて、明るいといつてもよいような気分で、七変^{しちへん}化^けのあじさいが、紅く、そしてラベンダー色に咲き誇るわが家をあとにした。

私が偶然、小指の先くらいな小さな珠を乳房に発見したのは、ほんの先々週のことであつた。その夜は酒客があつておそくなり、後片付けをして風呂から上がると、夜中の三時を過ぎていた。

みな寝静まっているのをよいことに、バスタオルを身体に巻いただけで鏡の前に腰掛けると、胸に組み合わせたタオルの両端をつまんだ指の先に、クリクリと触れるものがある。

オヤ！　　と思つて、右手をあげて、左の掌で右バストをさわってみると、その珠のようなものは、重い乳房を引きあげているいわば乳房のつけ根ともいうべき腕に近いかすかなくぼみに、はつきり掌に触れて、クリクリ動くのである。

昨年七月、舅を肺ガンで失つたあと、急に長年の疲れが出た感じで、夫のすすめで人間ドックに入つたが、過労があるだけで、理想的な健康体ということであつた。それまでは、新聞などからの知識で、ひと月に一ぺんは自分で風呂上がりにしらべていたのだが、ドック入りで安心して、さばつてしまつていた。

さっそく夫の会社の健保組合から配られている『家庭の医学』を繰ってみると、こういうクリクリでも、三十代ならあまり心配のない良性のものが多くようであつた。ともかく築地のC病院に行くことにして床についた。

人間ドックのご利益はせいぜい半年といわれているのに、今となれば自分でも理解に苦しむほど、すっかり安心して、このところガンのことなど思ひつかへてもみなかった。ふた月半ばかり前に、万博会場を一日十二時間も歩きまわつて、一家三人のタフさを誇つていたころには、もう大豆粒ぐらいにはなつていただろうに……

といつても、予約で満員のC病院でも、外科だけはまわりが早くて比較的時間をとられないので、しらべに行くだけ行つてみても損はない程度の気持ちであつた。どうせ、さわつてみて、なんだこ

んなもの、といわれるのがオチだろうと、気楽に、紹介もなく、家族にもいわずC病院に行った。

C病院の外科で診察をうけることになったX医師は、乳ガンの権威といわれている人であった。「あ、これか」と、すぐに例の珠をさぐりあて、意外に慎重にベッドにも寝かせてみて、手を上げ下げさせながら、さぐっていたが、「大丈夫！」と力強い、しかし念のためレントゲンをとっておくように、という。

私の職業やらなにやらを、冗談まじりに尋ねる感じがいかにも気さくな印象で、私もその医師に親しみを感じた。

「先生、もしガンだったら、家族におっしゃったりなさらないで、私に直接おっしゃって下さいね」

「どうして？ 家族だけが知っていれば、本人は知らなくてもいいと思うがなあ」

と、初対面ながら好人物を感じさせるその医者は、非常にきげんよく微笑をうかべながら、私の顔を見上げ見おろしながらいう。

「反対の場合もあるんじゃないでしょうか。本人は、自分の命に関することなんだから、それなりの整理をしておかなくてはなりませんでしょう。どうしてもやりたいんだというようなことだって、それぞれあるでしょうし。それに比べれば家族は、医者でないかぎり、知ったところで治して

やることが出来るわけでもないのに、ただ苦しみ悲しむだけなんですから、本人が知っていれば、家族にガンだって知らせなくてもいい場合も、なかにはあると思うんですよ」

「じゃあ、医者だけが知っていて誰にも教えないっていうのはどうかなあ」

「そうですね。でも今のところ、ガンの種類によつては死と同じにうけとられるものもあるんですから、本人の知らない死を知つてよいのは神様だけであるべきじゃあないでしょうか。それに……」

私はそこで打ち切ることにした。レントゲン室へ早く行かないと午後の仕事に遅れるという気持ちと、自分のいいかけたことにちよつと氣おくれがしたからである。本当は、「それに……病状によつては、患者の側で医者を選択するという問題もありますでしょう」と続けたかったのである。

カーテンのかげで衣服を整えながら、私は、カルテに書きこんでいるその医者に声をかけた。

「先生、お忙しいのに、こんなにお話して下さつたりして、ヒョツとしてヒョツとしてたんじやないんでしょうか？」

「アッハッハ！ あんたのがガンなんてことは、まずないね。信じていいよ。いや、しかし、わからんよ。僕はヤブ医者かもしれないよ、アッハッハ」

C病院にふらりと来て、こんな氣さくな先生に逢えるとは思つていなかったので私はホツとした。レントゲンの受付をたずねると、この国立のガン専門病院で、撮影日は一週に二日しかなく、しか

もむこう二週間はギッシリ詰まっているという。もう一度、先ほどのX医師にたずねると、良性のもので心配はないから、レントゲンは急ぐ必要なしのことであつた。ただ、将来それが変化した場合の参考に、一枚、暇なときにとつておいた方がよい、ということである。

しかし、その病院のレントゲン撮影日はすべて、すでにむこう三カ月、私の担当するテレビの番組の本番の約束が入ってしまっている。そうかといって、全国からガン患者が集まってきている病院の窓口で、そんな私的な事情をのべたところで通用するはずもないし、そんなことはいいたくもなかった。

そこで私は、日を改めて、夫の学友であるT病院研究所のY教授からの紹介状をもって、もう一度X医師を訪ね、ガンの可能性があるなら仕事などとはいっていられないから休んでも写真をとるし、もし至急の方へ入れていただければありがたいのだがといつてみた。X医師は、また例のクリクリを触診した結果、こんなものはどこにでもあるもので、レントゲンは、三カ月おいたところで、秋になったところで、どうということはない、仕事を休んでうつす必要なし、という答えであつた。初対面の時とちがつて今度は、ニコリともしない厳しい態度であつたから、私の方もあととはなにもいわなかったが、ドアをあけてから、思い切つてきいた。

「一応はレントゲンをとらなければいけないとおっしゃるからには、なにか名のあるものでしょうか？」

「センイセンシュ！」

と、X医師は明確に一言、いった。

ホッとした。そして、いつもの私なち、この問題はこれでチョンということにしていただろう。

だが、その夜、ふともう一度、『家庭の医学』のページをくつてみた。

繊維腺腫

若い婦人に多く、比較的多い病気である。一個または数個の硬いしこりが乳房の中にできる。痛みは全然ない。大きくなり方がおそい。良性のもので生命の危険はないが、後に癌に変わる心配はある。だから手術で切り取っておく方が安全である。手術の傷は小さくてすむ。

なるほど……。そうだ、もう一度、皮膚ガンで亡くなった姉が最後に世話になったT病院へ行ってみよう。今でもあの時の先生がおられるし、職員には、気持ちよく世話してくれる親戚もいる。姉のサチコは九年前、黒色腫という皮膚ガンの最初の段階でN大病院に入院し、普通のほくろと同じ処置をされてしまった。そのため取り返しのつかぬこととなり、ガン専門のG病院でも手がつけられず、発病から二年半後、最後にT病院で亡くなったのだった。

だが、C病院のX医師がT病院へ講師として来ておられるから、あれほど大丈夫といわれたものをまた他の病院へ行ったことが知れでもすれば、X医師に失礼になるし、また「なんでもなくてよ

かったですね」と早速電話をくれた紹介のY教授にも失礼なことになるのではないか。やはりT病院へ行くのは止めよう……

……でも今度にかぎって妙に気持ちさがサッパリしない。姉のときも、医者に対しての遠慮とか、紹介者への義理とかのために、あたかも命を捨ててしまったではないか。なん年前の口惜しさがまたこみ上げてくる。

……そうだ。やっぱりT病院へ行ってレントゲンを撮ってもらおう。どうせC病院の方では日時が折り合わないんだから、T病院に行っても、そんなにX医師に悪いということもないだろう。

思い立ったが吉日で、私はすぐ次の日T病院に飛んで行った。

C病院のときとはちがつて、童顔の医師に、

「そのしこりはどこですか？」

ときかれたとき、患者が場所をいわなくても触ればわかるのではないかと、ちょっと頼りない感じがした。しかし話しているうちに、そのS医師の、触診だけに頼りたくはないというやり方が了解できて、その考え方が今の私の気持ちにピッタリ合うのを感じた。

S医師は、ポツンポツンと口は重いがはっきりといった。

「結局のところ、細胞をとってみなければ、ガンか繊維腺腫かはわかりません。こんなの幾つもの